

## 南信が設計した岩田三郎邸の建設経緯とデザイン

9. 建築歴史・意匠— 2. 日本近代建築史

正会員 ○ 井上祐一\*<sup>1</sup> 正会員 安野 彰\*<sup>2</sup>

南信 フランク・ロイド・ライト

阪神間 郊外住宅地 耕地整理

## 1. はじめに

我が国が近代建築の本質を受容する過程において、F.L. ライトの影響は無視できない。それは、モダンデザインによる本格的な作品が国内に実際に建設されたこと、彼に師事した人々が、その後建築家として活躍したこと、ライト式やライト風といったスタイルが流行したことなど、多方面に及ぶものであった。南信も、ライトに師事した技術者のひとりで、多くの作品を残している。

南については、これまで、井上が、専門誌記事として掲載された情報をもとに、住宅作品全般の平面と意匠上の特徴を検討しているが<sup>1</sup>、ここで扱った『新建築』誌に掲載の「郊外に建つ家」及び「某氏の家」が、調査により「岩田三郎邸」と判明した。

昭和初頭に建設された岩田邸は、ライトの下で南が担当した山邑邸と芦屋川を挟んだ住宅地に立地する。その規模や、南の代表的な住宅作品と目される菅野邸や亀高邸が阪神間で同じ頃に計画されていること等から、南の業歴上、無視できない存在といえる。

今回は、土地登記簿、施主による建設当時のノート、見積書、実施時の図面、写真等の新規資料を加えて検討し、同邸が芦屋三條に建設される経緯、デザインの特徴を明らかにする。それを通して、住宅作品としての同邸の位置づけを明らかにする。

## 2. 建設経緯について

## 1) 精道村とその周辺の住宅地化

芦屋の前身、精道村での郊外住宅地化は、大正初頭から始まる耕地整理に依るところが大きい。本来、耕地整理制度は農地整備を目的に定められたが、大都市の周辺や近郊では明治末頃から、宅地化を前提に準用されるケースが増加する。大阪と神戸の間に位置する精道村とその近辺では、第1～11の耕地整理組合のほかに5地区を加えて計16の組合が組織され、昭和16年頃まで事業が継続される<sup>2</sup>。第1耕地整理組合は、大正5年5月に認可され、翌年に着工、同9年に竣工している。岩

田邸が位置した三條村北部は第9耕地整理組合に属し、大正8年末に組合が認可される。同9年に事業に着手しているが、竣工時期は明らかでない。同じ頃、芦屋北部の斜面地では、大正から昭和初頭にかけて、山邑邸が建設されるほか（大正13年）、松風山荘、六麓荘等、土地会社による開発が進み、上流向けの宅地化が進捗した<sup>3</sup>。

三條に接し、同様に耕地整理で宅地化された山芦屋でも、安井武雄設計の山口邸（昭和7年）や村野藤吾設計の中山邸（昭和9年）などが建設される。岩田邸は、こうした大邸宅群の一角を成していた。なお、隣接する土地の購入者には、岩田の前住所、大阪順慶通の森平兵衛や、その近辺、北久宝寺の堀内善五郎がおり、住宅地の情報が近隣関係で広まった可能性を指摘できる<sup>4</sup>。

## 2) 土地の取得から竣工まで

岩田家は、愛知の旧家であったが、明治3年から綿糸業を営み、同7年から大阪船場へ移り住んだ。明治43年、大垣師範学校を出て小学校長をしていた宇野助三郎が婿入りして岩田三郎となった。三郎は、義兄で4代目の常右衛門を手伝うが、しばらくするうちに、阪神間の岡本へ移住したという<sup>5</sup>。この時は借家住まいということで、自邸を構えるに相応しい地所を、阪神間を中心に探索していたと考えられる。

表1は、各種資料に記された、岩田邸に関わる事項を簡潔にまとめたものである。施主・岩田三郎が三條に土地を取得するのは、第9耕地整理組合認可後の大正14年11月であり、宅地化の整備が進むことを想定しての購入だったといえる<sup>6</sup>。三郎が記したノート（以下「ノート」と記述）によれば、大正15年7月、南信へ設計の依頼がされる。岩田が土地を購入してから南に設計を依頼するまでの間、南は同じ三條の地で菅野邸を手がけている。岩田は、竣工後間もない山邑邸や建設中の菅野邸を目にし、南の存在を知ったのだろう。

一方、南は、岩田邸の依頼を受けた後、大阪堂島から「芦屋山坂」へ事務所を移転している。上流向けの宅地開発

表1：岩田三郎邸の建設まで（増築を含む）

年月日など	項目	参照資料
大正 8, 12/25	精道村第九耕地整理組合が認可。	新修芦屋市史
大正 14, 11/5	岩田三郎が当該土地を購入。	登記簿
大正 15, 3/24	西隣の東の土地を堀内善五郎（大阪市東区北久宝寺町）が取得。	登記簿
大正 15, 6月号	三條・菅野邸の新築記事が掲載。	新建築
大正 15, 7/25	設計を南信に依頼する。	ノート
大正 15, 12月号	南の居所について「転居、芦屋山坂 1537」と記載。	建築と社会
大正 15, 12月	山本組が敷地東側溝を整備。	ノート
昭和 2, 8月号	計画案の模型が掲載される。	新建築
昭和 2, 11月号	計画案の平面図、透視図が掲載される。	新建築
昭和 3, 4月号	南の居所について「事務所新設、大阪市中ノ島大阪ビル 5 階」と記載。	建築雑誌
昭和 4, 1/22	栄一郎入籍を話し合うが纏まらず。	ノート
昭和 4, 2/13	北西の隣地を森平兵衛（大阪市南区順慶通町）が取得。	登記簿
昭和 4, 4月号	神戸・亀高邸の新築記事が掲載。	新建築
昭和 4, 7/5	竹中組と工事契約。	ノート
昭和 4, 7/18	地鎮祭。	ノート
昭和 4, 7/29	井戸掘削開始。	ノート
昭和 4, 10/2	上棟式。	棟札、ノート
昭和 5, 5/15	形式上の引越し。	聞取り
昭和 5, 7/16	岡本好文園の借家より引越す。	ノート
昭和 10	第九耕地整理組合解散完了。	新修芦屋市史
昭和 10, 5/21	岩田三郎逝去。	登記簿
昭和 11, 7/11	耕地整理により登記。	登記簿
昭和 13 頃	別棟に増築。	増築平面

が進む土地でたて続けに仕事を得て、阪神間での活動に可能性を見いだしたためと考えられる。昭和4年4月に誌上掲載される神戸の亀高邸も、芦屋に事務所を構えた時期に依頼された可能性が高い。しかし南は、遠藤新と共同で甲子園ホテルを設計するためか、昭和3年4月までに「大阪中ノ島」に再び事務所を移転している。

岩田邸については、『新建築』の昭和2年8月号及び11月号に計画案が掲載されている。すなわち、基本設計は大正15年夏から昭和2年秋にかけて行われた。しかし、施工者となる竹中工務店と契約を結び、着工するのは、昭和4年7月であり、その間約2年が過ぎている。ノートによれば、当時、栄一郎を養子として迎える件が検討されていた。さらに、耕地整理に伴う宅地整備の工事がこの頃に行われていた可能性が高い。こうした諸事情から着工が日延べされていたと考えられる<sup>7</sup>。上棟は、昭和4年10月と棟札にある。ノートに同5年7月16日転居とあるので、竣工は、同年6月末から7月上旬と推測される。

### 3) 竣工後

岩田三郎は、5年ほどをこの邸宅で過ごし、昭和10年5月21日に他界する。養子の栄一郎が家督を相続し、同13年頃、別棟に増築している。その際に添付された図面から、当初竣工時と考えられる岩田邸の様子が分かる。なお、耕地整理の換地を反映した土地の登記は、同11

年7月11日に行われている。

岩田邸は、昭和43年に売却され、震災までに取り壊されたようである。現在は、建設当初に造成された土地を囲む石組みが残されており、嘗ての大邸宅街の面影を伝えている。

### 3. デザインの特徴について

以降は、岩田邸の特徴について、平面計画と外観から検証する。内観については、写真等の資料が不十分なため、割愛する。

#### 1) 平面計画

平面図は、昭和2年の『新建築』掲載のもの（図1、図2）、同13年の増築時に添付されたもの（図3、図4）があるが、後者は同4年の新築実施時の図の再利用と見られる。『新建築』掲載時、すなわち基本設計時の平面図では、正方形に近い中央部の四方に部屋やバルコニーが外に伸びている。1階、2階とも東西に走る中廊下があり、各室を繋ぐ。廊下の南側と東西の翼には、主要な居室が配置され、廊下の北側は、階段、女中室、水まわり等の裏方がある。また、1階外部は東西の食堂と居間にテラスがあり、2階は全ての居室にバルコニーがある。全て洋室で



図1：基本設計時の1階平面図（『新建築』昭和2年11月号）



図2：基本設計時の2階平面図（『新建築』昭和2年11月号）

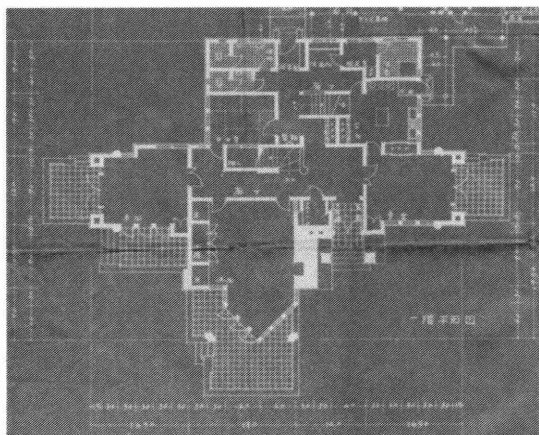


図3：新築実施時作成と考えられる1階平面図（主屋部分）

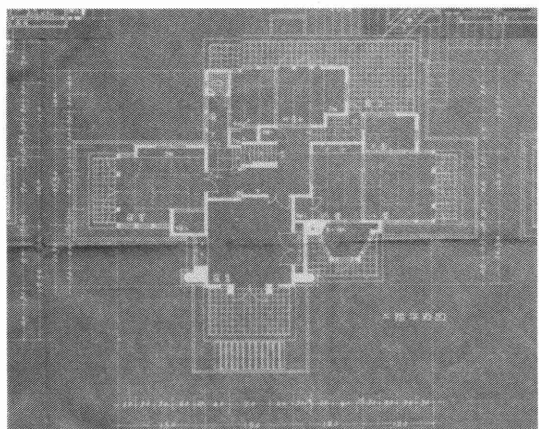


図4：新築実施時作成と考えられる2階平面図（主屋部分）

ある。

2年後に描かれたと思われる新築実施時の平面図では、基本設計時のものが変形され、中央部と四方の翼という関係は崩されている。廊下幅が大きくされた結果、これを境に南北で分かれる表と裏の関係がより強調された様子もうかがえる。さらに、各室の左右対称は崩れ、軸線にもずれを生じており、細々とした現実への対応が各所に見られる。また、2階の4寝室の内、3室が洋室から和室に変わり、バルコニーの面積が広がるなど、多くの設計変更がされたことが分かる。なお、眺望室及び物置から成る3階、雇人室・石炭庫・洗い場等を含む別棟が描かれている。

基本設計時の平面図にある凹凸が多い外形は、ライトの影響が見られるものの、ライトの作品に顕著な部屋同士の連続性は強くない。実施時の平面図においては、さらにライトとの類似性は希薄になったといえる。

## 2) 外観

まず、基本設計時に描かれたパース（図5）や同時期の模型を見ると、急勾配の屋根、塔屋、2階のバルコニーが主要素となっている。屋根勾配のきつさ、2階軒先よ

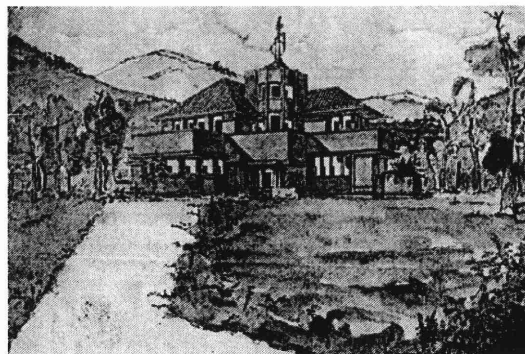


図5：基本設計時の透視図（『新建築』昭和2年11月号）



図6：竣工写真

りも張り出すバルコニーなど、プレイリースタイルとは異なる点が目立つといえる。

基本設計時から、いわゆるライト式とは異なる外観デザインの傾向が顕著であったが、実施時でも多様な要素を取り入れつつ、巧みにひとつのデザインに纏めている。

次に、竣工時の写真（図6）及び見積書などから、設計変更後の外観を検討する。塔屋の配置や急勾配屋根に見るように、基本設計時のイメージを踏襲して竣工した。構造は、1階をRC造、2階を木造とする混構造である。

外装材を概観すると、屋根は「丸瓦葺 北陸瓦伊太利式色物」、外壁はほぼ全体がスタッコ「モルタル塗りシン」仕上げとなっている。当時流行していたスパニッシュ系の材料が目立つが、岩田順之助氏（三郎の孫）によれば、屋根瓦は瑠璃色、スタッコ壁は少々黄色で、色彩は一般的なスパニッシュと若干異なる。一方、六角形の塔屋には「銅板」で葺かれた東洋風の屋根がある。また、玄関上のバルコニーにスクラッチタイルが、玄関前飾柱、2階南の寝室両脇の飾り石、段石、テラス・バルコニーの笠石、楯釣石などに「大谷石」が使用されるなど、ライトが多用した材料も各所に認められる。スパニッシュ、東洋風、ライト風の素材が混在した外観である<sup>8</sup>。

形態では、屋根の三角形、片持のバルコニー及び塔屋

から突出した矩形、2階洋室両脇の半円と矩形からなるアールデコ風の装飾など、幾何学的な立体感を強調しているという特徴がある。特筆されるのは、ライト設計の落水荘（1935年）を思わせる片持ちバルコニーの矩形と2階軒先との関係である。この矩形部分が上にかかる屋根の軒先より外に出る表現は、落水荘以前のライトの作品では、インガルス邸ほか計3例に限られ、表現も控え目である。しかし以降では、19例に確認できる<sup>9</sup>。

南の意図は不明だが、この表現は、ライトによる幾何学の扱いを更に抽象化して、矩形を強調したものと捉えるのが適当で、欧州でのモダニズムの影響と考えられる。ライトとの比較では、早い時期の表現といえよう。

このような表現も含め、全体の構成では、屋根、バルコニーと周囲の庇、テラスが順に突出することで、階段状に地面へのつながりが出来ているほか、玄関上のバルコニーのみにスクラッチタイルを使い、搭屋と地面との繋がりを損なわない配慮があるなど、外観を立体的に構成する志向を見ることができる。

#### 4. むすび

以上、岩田三郎邸の建設経緯とデザインの特徴について、新規資料を用いて検討した。

同邸は、耕地整理による住宅地に建設された上流住宅のひとつで、付近には、大阪からの土地購入者が居たことも確認された。岩田は大正14年末に土地を購入し、翌年の夏に南に設計を依頼、約1年後に基本設計がまとまるが、その後着工まで2年かかり、その間に様々な変更が行われた経緯が明らかになった。

デザインは、ライト風を基調としつつも、基本設計時から、それとは異なる要素が認められた。実施においても、ライト風を基調としつつ、スパニッシュ、アールデコ及びモダニズムに影響された矩形など複数のデザイン要素による外観を有した住宅であった。殊に、上の軒先より突出する片持ちのバルコニーは、ライト式のデザインがモダニズムに近づく早い事例として特筆できる。塔屋を含めて地面との繋がりを持った構成などは、立体感を強調するものであった。

また平面図を見ると、基本設計時、実施時ともに、当時に一般的な中廊下式を基本とし、実施時の外観でも、流行中の様式や東洋風の屋根を用いるなど、自国の事情に適応したデザインを積極的に展開している。この点は、その後自邸（図8）において、ライトの作風とは異なる

独自性を追求する南の志向性をよく示している。すなわち、岩田邸には、ライトの強い影響がある前作菅野邸（図7）から、モダニズムの影響が見られる自邸等の作品への移行期であった様子を伺える。岩田三郎邸は、十分な設計変更の時間を経た様々な試みや完成度とともに、作風の変化を示す意味で、南の業歴上、重視すべき作品と位置づけられる。

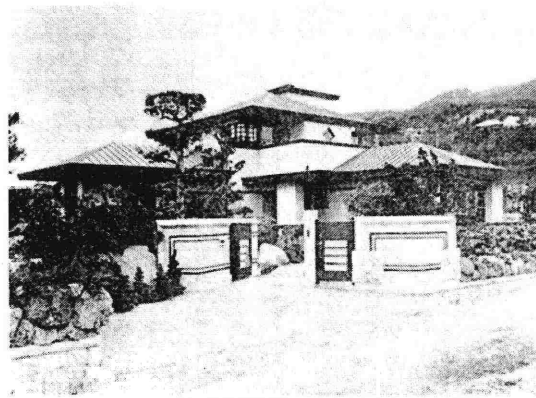


図7：菅野邸（『新建築』大正15年6月号）

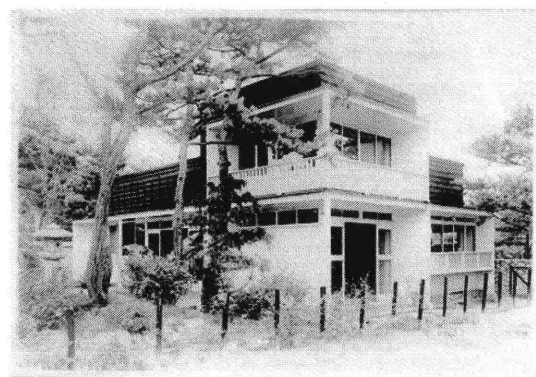


図8：南信自邸（『住宅』昭和8年第10月号）

註：

- 1 井上祐一、初田亨「建築家・南信の経歴と住宅作品にみられる特徴について」『日本建築学会計画系論文集』第571号 pp.129-136 2003年9月。
- 2 芦屋市史編集専門委員『新修芦屋市史 本編』芦屋市長渡辺万太郎 1971年 pp.697-794。
- 3 山本ゆかり「阿部元太郎による近代郊外住宅地開発：松風山荘住宅地を事例として」『日本建築学会計画系論文集』第618号 pp.123-127 2007年8月ほか。
- 4 土地登記簿の記録による。
- 5 岩田順之助氏からの聞き取りによる。
- 6 登記簿の記録と三郎のノートの記事（大正15年2月）が異なる。ここでは、登記簿の記録を採用している。
- 7 その間、南は、土地と風向の関係などを調査している。
- 8 亀高邸は、屋根が「黄褐釉エス瓦」、外壁が「クリーム色の石目モルタル壁」、石段・腰張・敷石・コーピング（笠木）等が「白味大谷石」で、岩田邸と類似する。菅野邸は、「屋根は銅板葺」「腰石は大谷石」「壁は卵黄色スタッコ塗り」「造作建具ラワン材」であった。
- 9 William Allin Storrer『フランク・ロイド・ライト全作品』岸田省吾監訳、丸善 2000年。

\*1 文化女子大学短期大学部生活造形学科・教授 博士（工学）

\*2 文化女子大学造形学部住環境学科・専任講師 博士（工学）